

美紗の会 たより

年の終わりに思ふこと

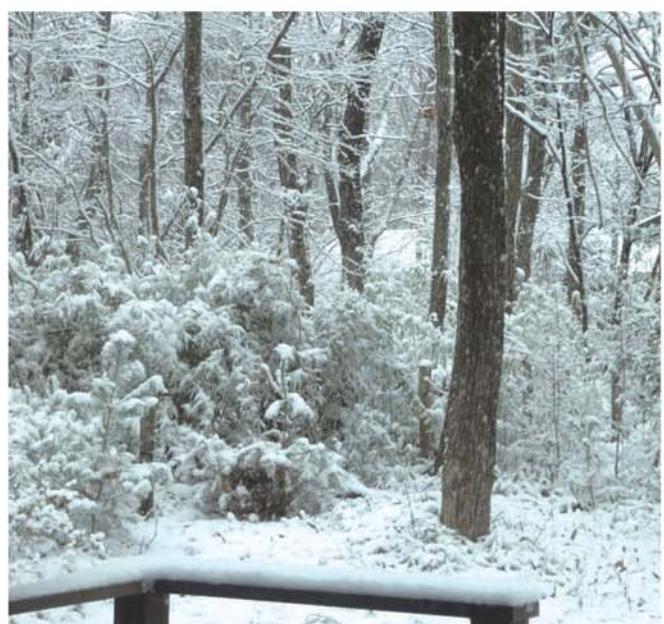
西松 布咏

第五十二回の「美紗の会のつどい」を終えたら、しばらく心の旅に出よう・・・と思った。夢中で歩み続けた道を少しふりかえってみたくなったのだ。

年頭に「新しき年は 江戸の女に還つて無限の天空に唄いたい」と心に誓つたが今年は物事がいつものように運んでゆかないもどかしさを感じ、この辺りで内なる旅を始める時期が来たような気がしてきた。十一月二十一日那須高原は紅葉で彩られ、たどり着いた小さな家の窓は、まさに晩秋の舞台の幕が開いたかのように風の奏でる音に舞う落ち葉がはらはらと降り続き、過ぎし日々が次々と蘇ってきた。始まりは四月のある日舞い込んだ一本の電話。「ドナルドキーン先生を是非鞆の浦に御呼びしたいので力を貸していただけませんか?」という女性の声。数年前にキーン先生の講演で「日本の風景のなかで鞆の浦が一番美しいと思う」の言葉をうかがい、必ず訪れたいと、翌年の晩春 岐阜出張の帰りに足を延ばした。

なるほど海の香り漂う小さな港町の路地は江戸の面影そのままで足の向くままに入つた小さなカフェの壁にキーン先生の新聞記事。その女主人と色々話をしこんだことがきっかけだった。あまりに唐突な申し出に大いに躊躇したが、その

昔 新潟岩室温泉の公演で知り合つた義太夫の名手がキーン先生の養子になられたことを糸口に何とか話しを繋ぎ、この秋に講演が実現可能となるはずだった。だが、受け皿になるべく現地にスponサーや動けるスタッフがいないと頓挫してしまつた。ここまで頑張つたのに・・・どうしてもあきらめられずそれなら私が!と手弁当覚悟で「三味線で綴る江戸の香」のタイトルで安政二年に創業した酒蔵の座敷での演奏会を企てた。この夏に再度訪れた時、私の脳裏に「その昔鞆の浦は行き交う舟の潮待ち港として賑わい 客をもてなす遊女の三味の音が寄せ返る波にまぎれ」と過ぎし昔の光景がさまざまと蘇り、坂本龍馬もこの地での世界貿易を夢見たように私の夢も大きくふくらんでいった。しかし今やこの地は人口も少なく三味線に耳を傾けるような粹人はすでにいなくなり客の誘致は難しいとの、識者の声にあきらめざるを得なかつた。キーン先生は事あるごとに日本文化の素晴らしさを鼓舞し、古典文学からこれまでからの日本の行くべき道を学んで欲しいと啓示して下さつてゐるのに当の日本人は知らん顔なのだ。でも思いもかけないきっかけで結ばれた縁の糸をこれからも大切に未来への心の架け橋にしたいと念じている。



那須滞在の二日目は早朝の地震で目が覚めた。天災は忘れた頃にやってくると、五年前の震災の恐怖が蘇る。「儂い国に生まれたから ひとは夢を祈つて來た。かそけき音に望憶の声に耳を澄ませ・・・」とメッセージージを寄せ、ますます唄の研鑽を心に刻んだことを思い出す。三日目の朝 再度の地震で目を覚ますと晩秋の舞台は一夜にして雪景色に塗り替えられていた。五十四年ぶりの初雪の訪れがこの世のものとは思えなく果然と窓辺で晩秋から冬へと転換した舞台を眺め続けた。

やがて過ぎし昔がまるで一枚の手紙のように空から舞い降りて來た。初めての海外公演・北米のアムハースト大学での公演を終えた翌日。独り残つた古い校舎の片隅で窓辺に降りしきる雪景色を眺めながら亡き西松文一師を偲び繰り返し唄つた「地唄・ゆき」・・・今から二十四年前の十一月のこと。夢か現かの時間をしばらく過ごし、その日には帰宅出来ないかも。と案じたが昼過ぎには雨にかわり夕

暮れ時には何事も無かつたような東京に帰つて来た。
翌日は友人と約束していた根津美術館で「円山応

挙」の画を鑑賞した。

紅葉が最後の見納めの日曜日とあつて庭園も館内も大層な混雑だったが閉館間際は潮が引くように数人となりゆつくりと（雨竹風竹図屏風）を鑑賞出来た。真っ白な背景に一对の竹の屏風。右は風にそよぐ墨色の笹竹 左は雨にけぶりまぼろしのように白に同化してゆくかのようなひと刷毛の笹竹。何処かで見たような構図の屏風絵だ。遙か昔ブルーミントンのインディアナ大学での「浮世絵学会」に参加した帰りに立ち寄ったクリーブランド美術館で観た応挙の画を思い出した。それは死ぬ間際に描いたとされる秋・冬の対の屏風絵。

そのときの印象をたより十八号（音楽ふれあいの旅）でこう綴つている。

晩年のその作品はわずかに一枚 紅色をにじませて風に舞う紅葉と、屏風の白に同化してしまいかのようになる雪の静けさが淡々と描かれていた。まるで自分の死を予感したかのよう自然と一体となり、紅葉と雪のひとひらに己を全うした作品に胸打たれた。私もいつかはこんな心境で「地唄・ゆき」を唄いあげたいと・・・

こんな文章を書いてから二十余年経つてしまつたがその想いは消えずに、遙か遠くに聞こえる音を求め彷徨い歩いている私がいる。

「美紗の会のつどい」を終えたあとにしみじみ思つた幸せは、未だに道半ばの私の後をついて来てくれる弟子がいること。
会のあとの短い旅は ふりかえる未来への旅だつたのだ。

これからも命ある限り唄い続けてゆきたい。
来年の夢である。

小唄・端唄の江戸恋ニコロ

高橋 三千綱

「初雪に降り込められて向島 二人が仲に置炬燵 酒の機嫌の爪弾きは 好いた同士の差向かい」

小唄「初雪」の一節である。墨田川がまだ地元では大川と呼ばれていた明治二十年頃の初代清元菊寿太夫の作品である。年配の男と売り出し中の芸妓が示し合わせて向島の料亭で落ち合う。暗い外には今年初めての雪が降っている。

炬燵に入つて芸妓の到着を待ちわびながら爛酒を呑む男。

人力車から降りる芸妓の髪に桜の花のような雪が降り、吐息の向こうから大川の流れる冬の波音が響く。いい図ではないか。

この夜「赤坂クラブ」で開催された小唄・端唄の会に紛れ込んだ私は勝手に唄に連れて展開する江戸情緒を楽しんでいた。「初雪」を唄つていたのは女優かたせ梨乃で糸（三味線）は、このつどいの会主の西松布咏さんである。

この夜唄われた小唄・端唄は四十三曲、新内小唄が二曲に上方唄が三曲。最後に花柳千壽文師の「青いガス燈・すすきかついだ」の踊りがあった。普段は歩くことも困難だという花柳さんが踊るとすつと江戸時代に引き込まれた。

俳人の蕪村が京女は性悪だといったが、多分それは当たっている。相次ぐ戦乱の舞台になつた京で生き抜くには男をたぶらかすほかなかつたのである。だが江戸女はそうではなかつた。新しく作られた町に生きる女には田舎者の藩士を手なずけることより、町に活気を生みだすことが生き甲斐だと思つたのだ。

「美紗の会のつどい」を終えたあとにしみじみ思つた幸せは、未だに道半ばの私の後をついて来てくれる弟子がいること。
会のあとの短い旅は ふりかえる未来への旅だつたのだ。



以前、私は一人の江戸女に会つてゐる。ひとりはひつそりと小料理屋を営むつましく美しい女将で、私が手酌でいいと言うとカウンターの中からずつと寂しげな微笑みを浮かべていた。彼女は歌人だつた。もうひとりも中野で小さな小料理屋をしてゐたが、この人は小粋に着物を着こなしてふたつだけのテー

ブルの間と調理場を行き来し、泣けるような酒の肴を作ってくれた。細面の中にある濡れた瞳が扇情的だつた。琴を教えるという女は、しかし寡黙だつた。かつては佃島では江戸の女を感じさせる色白で小柄、顔立ちの整つた女性を良く見かけた。このあたりに下宿屋がないか、あつたら借りようと思つたことも再三ある。

この夜の小唄の会で三人目の江戸女に会つた気がする。会主の西松布咏さんの唄う新内小唄は本来は男が唄うものだが代役として西松さんが唄うと柳橋芸妓の心意気が感じられて腹に響いた。

このつどいには音痴な人も声量不足の人も居たが、会が終わつた後の宴席では皆 無礼講で酒を飲み、愉快この上なかつた。不平不満、噂話、揚げ足取りなど一切出さない明るい女達の小唄を忍ぶ会なのである。その中に小さくなつた男が遠慮がちに酒を呑んでいた。挨拶に立つた貴禄のある女性が話し出すと誰かが声が小さいと言つた。すると女性は婉然と微笑んで「あなた耳が悪いんじやないの」と言い返した。男は黙りこくるしかなかつた。女性は外科医であつた。

三味線はうちわで扇ぐように撥で弦を叩く。返し技のスケイ、弦を左手の指で押さえ音を出すハジキ、三本の弦から紡ぎだす江戸の活力。深淵なる迷い道。三味線の皮は猫、撥は鼈甲、必殺仕掛け人の新内流しが使う弦は蚕の糸、皆生き物から作られた江戸の職人技だ。会席料理と酒と女。江戸を堪能したぜ。

おさらい会を間近に控えたある日、布咏先生の稽古場でお弟子仲間の菊地郁花さんの姿がふと目にと

まつた。菊地さんも私と同様、部屋の隅で自分の稽古の番が来るのを待つていらしたのだが、ただ座っているだけの姿がとても自然で美しく、シンとした静謐な空気が周りを取り囲んでいるような気がして見えた。「たたずまい」という久しく口にしなかつた言葉を思い出したりもした。

菊地さんが三歳より地唄舞の家元であるお祖母様に師事し、閑崎扇ひでという名前も持つ舞手であることは伺つてはいたが、身につくとはこういうことなのかと感じ入つた。

その菊地さんがお祖母様閑崎ひさ女さんと一緒に舞の会をなさるという。家元ひさ女さんにとつては舞踊生活六十年の集大成、その後継者としての扇ひでさんのお披露目の会としての意味合いもあるという。

長くひさ女さんと舞台をつとめてきた布咏先生が唄と三絃。尺八は善養寺恵介さん。美紗の会の先輩である己紗咏花さんもお琴で加わる。大切な会だからこそ最高の舞台にしてあげたいという布咏先生の思いも感じられた。

最初の演目は茶道の所作も入る「茶音頭」。幕が上がるとき、朱の衣装に身を包んだ扇ひでさん。その愛らしさに客席の雰囲気が温かく和むのを感じた。可愛らしく舞う扇ひでさんを応援するかのような布咏先生の唄と三絃。その傍らで咏花さんがお琴で彩りを添えていた。

もう一曲の「八島」は打つて変わつて源平の戦いを題材にした勇ましい男舞。普段の物静かな扇ひでさんとは別人のようであり、若々しく伸びやかな動きに片時も目が離せなかつた。力強い布咏先生の唄と三絃の響きに、善養寺さんの尺八の深い音色が加わり「八島」の世界が更に厚みを増していった。



六月十七日、前日まで梅雨のすつきしないお天気が続いていたが、その日は晴れ。会場の紀尾井ホールには和服姿の女性も多く、舞の会のムード満点だつた。扇ひでさんのお友達らしき若いお客様が最前列に陣取り、美紗の会のお仲間も大勢駆けつけていらした。

ひさ女さんの舞「愚痴」は息が詰まる思いで見た。たまにしか逢えない男との逢瀬の嬉しさ、別れの辛さ、何より愛しい男への熱い思いが、静かな動きの中から切々と伝わつてくる。舞を支える布咏先生の唄・弦の響き。声が長く伸び、揺らぐ・・・その揺らぎの中で様々な感情が湧き起つて、身じろぎもできずにいる私の祖先の血までが熱く滾るのを感じた。子どもの頃見た日の出直前の光景を思い出す。私の故郷では朝日は海から昇る。夜明け前の浜辺、立ちこめる朝もやの中、暗い海が少しずつ色を変えやがて水面に微かな赤い点が現れる。点は浮かんでは消えを繰り返し、繋がり、幾筋もの帯を作り出す。そして帯は次第にその赤さを増し、波の上で揺らぐ・・・海の向こうに太陽が姿を見せるまでのほんのわずかな時間、この世のものと思えない美しさに

幼い私は陶然と立ち尽くしていた。布咏先生の声はそんなつかの間の恍惚を思い起させた。舞の会が終わり紀尾井ホールを後にして夢うつの中、なかなか現実の世界に戻れない私がいた。

ゆらゆらと夏の終わり

飯名 尚人

埼玉から練馬を通って目白通りを車で移動していくと秋葉原の鉄橋をくぐった途端、区画が明瞭になってきて、建物と建物の隙間もわずか、両側に建つ大きな壁の間を車ですり抜けているような風景になる。建物はどれも四角い箱でデザインは様々で新しいのだけれど、実はヨーロッパの古都と同じ趣もある。人形町の駅から路地をふたつ曲がると「よし梅芳町亭」のこじんまりとした入り口、足も氣も速い人であれば、気づかず数歩で通り過ぎてしまうようだ。頂いたパンフレットには「人形町界隈は徳川家康が国替えになつた時に、最初に町づくりを始めた」とあり、江戸城（現皇居）周辺の人工的な区画はお国のトップダウンで整備されたわけである。江戸の区画は何百年も残っているけれど、建物は、空襲、バブル時の開発で残念ながらほとんど残っていない。関東大震災後に建てられた芳町亭は奇跡的に残つた。

演奏の前に女将の高野多身予さんがこの建物の中を丁寧に案内してくれる。決して広くはないけれど、床柱から天井板、板を支える竿、押入れの鍵、どれも細かくこだわりある細工が施され、どことなく柔らかく可愛らしい内装。一時は芸者から映画女優となつた花柳小菊の住居でもあつたとのこと。「子どもの頃、母と近くの銭湯に行くと、そこには綺麗なおねえさんたちがたくさんいて驚いたのを覚えて

いる」と多身予さん。ここはかつての花街・芳町である。建物の匂いと女将の言葉に、自分には無いはずの記憶が蘇り、夏の終わり、夕暮れ、湯上りの洗い髪で嫋娜な芸者たちが狭い路地を無邪気に話しながら並んで歩く風景に、母に手を引かれ銭湯に向かう子どもの女将の姿を勝手に憶う。

九月三日、よし梅芳町亭での演奏会、夏の終わりの東京で布咏さんはどんな選曲をするだろう。毎回、場所や季節に合わせた選曲が、見事な演出となり見どころといえる。この日演奏された曲のいくつかは聞き覚えのあるもので、舞台作品「アジール」の中で唄われたものであつた。「嘘とまこと」「身はひとつ」の歌詞にある「三叉」というのは日本橋中洲付近、川が三路に分かれる分岐点のことだそうだ。小唄「湯上がり」、「中洲河岸」。芳町亭に入ったときから勝手に想像した人形町界隈の匂いが、これら選曲にあ



撮影 福原毅

あいだに、歌謡曲「お富さん」が無伴奏で唄われた。死んだはずだよお富さん。春日八郎が「ミカカルなメロディーで唄つたヒットソング。この唄の背景を布咏さんがお話になつた。歌舞伎「与話情浮名横櫛」からつくれたもので、与三郎とお富、一目惚れしたもののお富は木更津のヤクザの妾。二人は好きになつたばかりにヤクザに痛めつけられたり、逃亡自殺したり、いろいろあって生き別れ。三年後、傷だらけの与三郎は江戸で洗い髪のお富とばったり出会う。嬉しいやら悲しいやら。メロドラマだね、なんて笑つていられない。男と女の諸事情は一筋縄ではいかないものである。こんな風にあらためて歌詞の意味を知ると、「お富さん」だけでなく、この日唄われた短い曲に詰まつた江戸の心情・風景の奥行きに驚かされる。

唄う布咏さんの後ろには波板ガラス。ゆらゆらと不均一な波板ガラスから見る山茶花が綺麗だと多身予さんが教えてくれた。氷の表面のようにも炭酸水のようにもみえ、涼しげで幻想的。ゆらゆらガラスに映る自分の姿と外の景色に芸者たちは何を想つて居ただろうか。



撮影 福原毅

岐阜の粋艶会

一段落の会を終えて

加藤 多貴子

あれは平成十九年の春、岐阜・たか田八祥における「春を味わふ 江戸の唄と懐石料理の出逢い」と題した演奏会だったかしら。布咏師匠の演奏をお聴きになつた岐阜でご活躍の三弦司原様から、岐阜・名古屋各界の名士を集めて発足なさつた粋な旦那衆による小唄の会「粋艶会」に東京から出稽古に来て頂けないだろうかと切望されたのです。

再三再四の要請に、それも何故か私加藤に猛アタック、原様の熱意に絆され当初から二の足を踏んでおられた師匠の背中を押して押して前からも引張り、岐阜への出稽古を実現させたのでござります。あれから歳月が流れ、「粋艶会」が九月十八日の浴衣会をもつて一段落との報に、何はともあれ岐阜迄馳せ参じました。当日台風接近の情報に、ホテルから会場の天然鮎で有名なかわらやさん迄着物での移動に一切雨具を持たぬ私は、案じましたが、指定時間の二時になんとかタクシーを滑り込ませることができました。

かわらやでは、最終稽古をつけながらの師匠の着付も終え、三時キツカリにいつもの飄々とした原氏の名司会進行に本番スタート、楽しみながら各氏の名調子の唄を拝聴するつもりが、昨夜の師匠の一言に落ち着かずアツという間に前半の刻が過ぎて行きました。

「折角岐阜迄いらして下さったのだから、粋艶会の皆様の為にアナウンスをお願い！」全く予期せぬことでしたが、覚悟を決め度胸を据えて後半開始、会場はいつもの芸者衆も沢山いらして下さり満席で

す。その頃には、雨足が酷く外は台風の様相を呈してまいりました。そんな中私が第一声を発した途端、お客様からマイクの雜音が煩わしいとクレーム、泣きが入った私ですがそこは、笑顔で「それでは、地声の大きな声で後の席迄聞こえる様に頑張りまあとす」。かくして、額に冷汗 手に汗と私の誠意で皆



として締めくくりは、美紗の会恒例の至極のコンビでございます師匠の唄と糸に花柳千壽文師の舞踊に客席から満場の拍手。目の肥えた芸者衆からも羨望の拍手をいただきました。

この様な形で「粋艶会」は一段落致しましたが、岐阜の皆様との御縁は、途切れることなく続いて参ります。新幹線で稽古に通つて下さる方々、「美紗の会のつどい」にご参加希望の方々。そして来春には又師匠を囲んでの会を開きたいとの声が早くもあがっております。中部・近畿地方での師匠の演奏活動にご支援下さる方々、私共の美紗企画が掲げる「伝統を未来に！」御参同下さり、どうか今後共、御支援御助力賜たく重ねてお願い申し上げます。

山本健君を偲ぶ

本郷 公基

去る九月五日、商船三井のOB・OGの会「松柏会」のメールを見て驚愕した。「山本健様九月一日（金）癌のためご逝去、享年七〇歳」と書いてある。

最近、先輩や同期の親しい友人が次々と亡くなるが、山本健君は会社では十年後輩である。どうして彼の様な好漢が先に逝くのか？私は思わず天を仰いだ。

私は、五年前に美紗の会を退会して以来、彼とは毎年松柏会で言葉を交わすぐらいで、親しく懇談する機会がなかった。だから、山本君が癌を患っていることも知らなかった。

彼は開成高校や慶應大学のラグビー部で活躍したスポーツマンである。最近でも開成学園OB部ラグ

ビー会会長として、後輩を指導していると聞いていたので、「ヤマケン」が健康を損ねているとは夢にも思わなかつた。

共に商船三井の現役時代、私が社長をしていた飛行船会社「エム・オー・エアシップ」に出向してもらい、共に営業や労務管理に苦労したこと思いだす。飛行船が初めて横浜の基地に到着した日、飛行船「アサヒスースーパードライ号」を背景にして、撮影した記念写真が、新聞記事と共に私の手元にある。彼はその頃、鎌倉に住んでいて、ご夫妻で新鎌倉山の我が家に来られたこともあつた。

お酒を飲んで、仲間と語り合うことが大好きな山本君は、飛行船会社でも仕事が終わつた後、社員となるミニケーションに励んでいた。ある日、横浜の基地から帰宅途中、一杯やって、JR東神奈川駅から大船行きの根岸線に乗車した。座席についたら眠気が襲い、眠り込んでしまつた。電車が停止したので、気が付いたら、大船ではなく大宮だつた。電車は、大船で折り返し大宮行きになつたのを眠り続けて、大宮まで行つてしまつたらしい。大船行きの最終電車は出た後でやむなく、タクシーで鎌倉まで帰つたといふ。

美紗の会には、私が大阪の「名門大洋フェリー」に移つた平成十年に入会した。私の送別会が赤坂三平で催された時、私の後釜として山本君を西松師匠に紹介した。師匠によると「先輩が是非にと申されるので入門を・・・」と彼は迷惑った顔をしていたらしい。



な唄いぶりだつた。

その後彼は、商船三井出身の弟子で初めて名取となつた。平成二十五年四月の第四十五回「美紗の会のつどい」で、新名取のお披露目があり、わが「己紗健咏」は「浜町河岸」を粹な唄いぶりで披露した。そして終わりは、三味線にのせて「浜町河岸の宵の三日月」と見事に唄い切つた。この曲は私の好きリフのように「ほんに思えば 私ほど」と語りかけ、な唄でもあり、私は思わず大きな拍手をしていた。これからも宵の三日月とともに爽やかな好男子、山本健君を想うことだらう。

今後の予定

◎十一月十八日(日)午後一時より三時

絡和ヴィラサラサ「集会室」

江戸唄のひととき

西松 布咏(唄と三味線)

◎四月一日(土)午後三時半より七時

浄土宗 浄心寺

第一回わくら結びの会

さくらに寄せる江戸唄と落語

春風亭 正朝(落語)

西松 布咏(唄と三味線)

◎四月十五日(土)十一時半より

赤坂クラブ

第五十三回美紗の会のつどい

◎六月十七日(土)

人形町

登録有形文化財 よし梅芳町亭

唄と語りで綴る「にじりえ」の世界

西松 布咏(唄と三味線)

奥山 真佐子(語り)

第一部 十一時半開場 十二時開演

第二部 四時開場 四時半開演

■たより 第84号
発行者 美紗の会
編集責任者 大久保朋子
デザイン 近藤幹則
■美紗の会
主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三一一二二
白金台フレイス三階
電話 (三四四一)一七一六
(五四四七)一一四一二
E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp
[URL:<http://www.misanokai.com/>](http://www.misanokai.com/)